

YOKOKOKU KOKUKOKU

横国刻々



“多様性”を
実現するための
取り組みを特集

みらいは、ちがいから。

CONTENTS

特集

02-14

ONE CAMPUS WITH DIVERSITY

みらいは、ちがいから。

04-11

ダイバーシティを「実装」するには？ ——YNU研究拠点紹介

島 圭介 (環境情報研究院/総合学術高等研究院 准教授
バウンダリ・スパナー・デザイン研究拠点 拠点長)

大沼 雅也 (国際社会科学研究院/総合学術高等研究院 准教授
バウンダリ・スパナー・デザイン研究拠点 副拠点長)

高野 陽介 (ダイバーシティ戦略推進本部 D&I教育実践センター 講師)

泉 真由子 (ダイバーシティ戦略推進本部 D&I教育実践センター長)

12-13

誰もが過ごしやすいキャンパスをめざして セクシュアル・マイノリティに関する 学生生活Q&A 抜粋版

14

異文化をつなぐ場づくり 常盤台インターナショナルレジデンスでの ウェルカムパーティー グローバル・commons

15-25

YNU PEOPLE

16 「置き配」から「宇宙」まで。法学の目で新たな輸送の仕組みづくりを。
世岡 愛美 (国際社会科学研究院 教授)

18 「壊れ方」を見極める技術で、インフラの高齢化に立ち向かう。
田村 洋 (都市イノベーション研究院 准教授)

20 子どもたちに好奇心の種をまき、科学の楽しさを伝えたい。
飯島 瑞稀 (理工学部 化学・生命系理工学専攻 博士課程 2年)
杉本 結花 (理工学部 化学・生命系理工学専攻 博士課程 3年)

22 観る人も、プレーする人も魅了する。このスポーツとともに成長したい。
戸澤 玄 (代表: 教育学部 学校教員養成課程理科専門領域 2年)
矢口 大樹 (広報: 教育学部 学校教員養成課程技術専門領域 3年)

24 制御工学の面白さに魅せられて。
自動運転技術の開発に繋がる横国での学び。
中村 克子 (本田技研工業株式会社/工学部 物理情報工学専攻 出身)

26-27

横浜国大の名物授業！

「ジェンダーと教育」

堀内 かおる (教育学部/教育学研究科 教授)

「原価会計論」

高橋 賢 (経営学部/国際社会科学研究院 教授)

「物質科学」

上野 和英 (理工学部/工学研究院 准教授)

28-31

横国生のランチ事情

29 CASE_01
インドネシアからの留学生 アリシャさんのランチ事情

30 CASE_02
研究に学生団体に大忙しの 瓜生さんのランチ事情

31 CASE_03
“和田べん”を愛してやまない 伊東さんのランチ事情

32

YNU NEWS Vol.8

いまなぜ「多様性」が社会や大学に必要なのでしょうか。
それは、多様性がある方が健全だったり、安全だったり、
また成長の可能性が大きかったりするからだと言われています。

かつては均一集団で皆が同じ方向を見て

スムーズに意思統一を図ることで

組織がぐんぐん成長していった時代がありました。

しかし現代社会ではグローバル化、デジタル革命、

人々のライフスタイルや価値観の変化等により、

今までと同じやり方では成長に繋がらないという現実がみえてきたのです。

横浜国立大学では、人や社会の「多様性」を
豊かにする研究・教育があちこちで展開されており、

今回はその一部を紹介します。

本学の「多様性」の一端を覗いてみてください。

広報委員会 委員長 (理事・副学長)

泉 真由子

み

ら

い

は、

ち

が

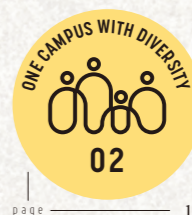
い

から。

あらゆる場所での重要性が認められつつある「多様性」。本学でも、2023年に約20年ぶりとなる大学憲章の改定が発表され、新たに「多様性」の理念が追加されることとなった。さまざまなバックグラウンドを持つ学生や教職員が安心して力を発揮できる場を作るために、あるいはそれぞれの持つ「違い」を活かし、新たな何かを生み出すために、本学はどのような取り組みを行っているのか。3つの企画から掘り下げる。

ONE CAMPUS WITH

DIVERSITY



横浜国立大学 学長
梅原 出 UMEHARA Izuru
2009年より本学大学院工学研究院 教授
2021年より現職
専門は固体物性物理学(超伝導、磁性)

——大学憲章に「多様性」の理念を追加することになった経緯を教えてください。

本学は「知の統合型大学」というビジョンを掲げ、グローバルに活躍する人材を輩出する世界水準の研究大学を目指しています。そして「知の統合」が成り立つには、そこに集まる人々の多様性が不可欠です。研究分野やジェンダー

の違い、障がいの有無といった垣根を取り払い、「よい風が吹くキャンパス」を目指すために必要な精神として、「多様性」を加えました。

——横浜国立大学には、どのような「多様性」が存在するのでしょうか。

本学は約80の国と地域から留学生を受け入

れており、多様なルーツを持つ学生がともに学んでいます。また、すべての学部が「ワンキャンパス」に集まっているため、異なる分野の教員同士が連携する機会も多く、学際的な研究・教育を良しとする風土が醸成されています。企業や自治体、地域社会といった多様なステークホルダーと「共創」する場における研究成果を社会に還元することも、目的のひとつです。

横浜国立大学憲章

横浜国立大学は、現実の社会との関わりを重視する「実践性」、新しい試みを意欲的に推進する「先進性」、社会全体に大きく門戸を開く「開放性」、海外との交流を促進する「国際性」を、建学からの歴史の中で培われた精神として掲げ、一人一人の在り方を尊重し合う「多様性」を重んじ、世界の学術研究と教育に重要な地歩を築くべく、努力を重ねることを宣言する。

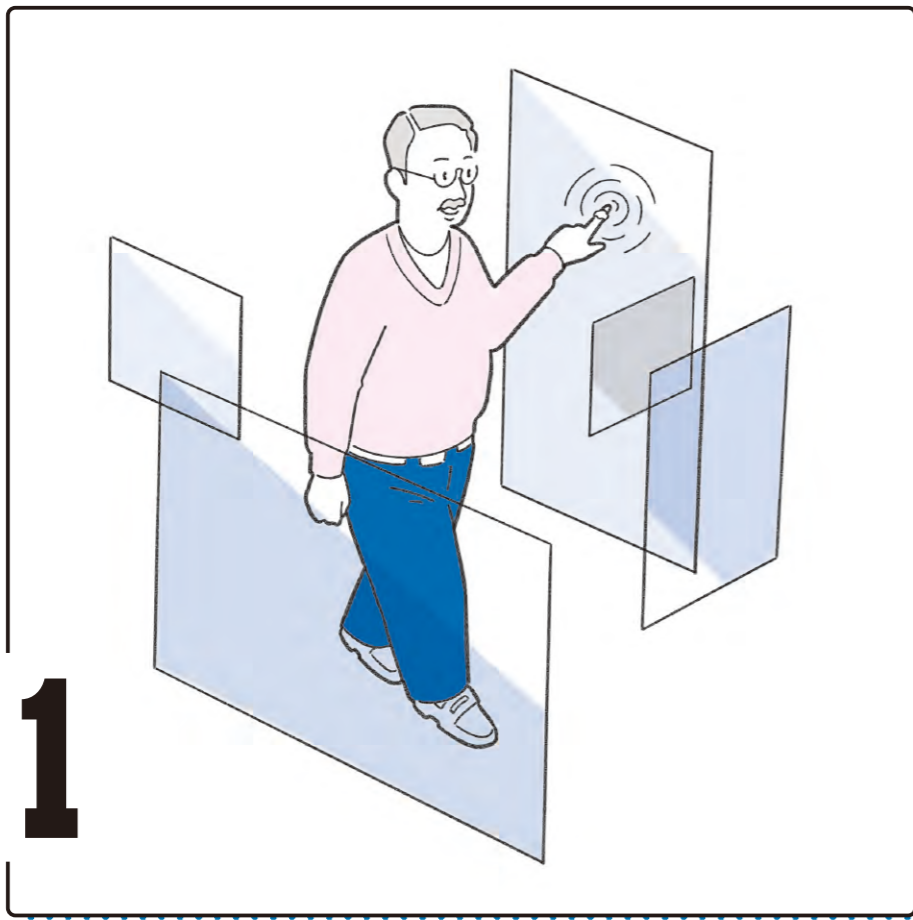
- ◎ 実践性 Be Active
- ◎ 先進性 Be Innovative
- ◎ 開放性 Be Open
- ◎ 国際性 Be Global
- ◎ 多様性 Be Diverse

ダイバーシティを「実装」するには？

— YNU研究拠点紹介

「多様性(ダイバーシティ)」が大事なテーマであることは、いまや誰もが疑わない。しかし、「あらゆる人が自分らしく力を発揮できる」社会の実現には、まだまだ時間がかかりそうなのも事実だ。ここでは多様な社会の実現に向け、研究開発に邁進する本学の研究拠点を紹介する。

最先端の研究成果を、社会で「使ってもらう」には？ — 多様な健康長寿社会のための 「バウンダリ・スパー・デザイン研究拠点」



RESEARCH BASE
01

本学の研究からは、社会を変えうる先進技術の種がいくつも生まれている。しかし、ただ技術を生み出すだけでは、実際に社会のなかで役立てられるかわからない。「技術と社会をつなぎたい」という問題意識から、ヘルスケア系の分野に関心を持つ若手研究者たちにより2021年に立ち上げられたのが、バウンダリ・スパー・デザイン研究拠点だ。バウンダリは「境界」、スパーは「つなぎ役」の意。同拠点は「多様な健康長寿社会」を実現するため、分野の垣根を越えて共同研究に取り組んでいる。

RESEARCH BASE 01



SHIMA Keisuke



OJIMA Masaya

RESEARCH BASE 02



TAKANO Yoko



IZUMI Mayuko

事例紹介 01

「転ばない社会」を実現したい — 転倒リスクの顕在化および転倒防止

「見えない壁」で転倒を防ぐ

バウンダリ・スパー・デザイン研究拠点の軸となるのは、社会に潜む「転倒」リスクを明らかにする研究だ。研究者個人としても長年この研究に取り組んできた、拠点長の島圭介教授は次のように語る。「転倒というと、高齢者だけの問題というイメージがあるかもしれませんが。しかし実際には、労働災害の原因として最も多いのは転倒です。バリアフリーをはじめ、転倒を避けるための環境づくりもこれまで行われてきましたが、それでも事故があまり減らない。それなら人体の側をサポートする必要があるのではないかと考えたんです」
そこで島先生が開発したのは、指先につけるだけで転倒を防止できるデバイスだ。これは「指が何かに軽く触れているだけで、姿勢のぐらつきを自然に防げる」という不思議なからだの機能、「ライトタッチ」を応用したもの。このデバイスで「何かに触れている感覚」を仮想的に作り出し、その「見えない壁」で転倒を予防する。比較的邪魔にならない大きさなので、高齢者や高所作業員も使いやすい。「同じ技術を応用して、新しく転倒リスクも数値化できるようになりました。『この方は転倒しやすい健康状態だから定期的に体操をしてもらおう』、『今日は危なそうだから現場に出ないでデスクワークしてもらおう』といった判断に役立ててもらえるといいなと思っています」

普及の鍵は「わかりやすさ」

このように、技術レベルでは効果的な転倒対策がいくつも生まれている。しかし問題はその先だ。せっかく優れたプロダクトを開発できても、それを普及させられなければ「転倒のない社会」は実現できない。利用者の目線で使いづらいつころはないか。職場や施設で受け入れてもらいやすくする方法はあるのか。それらを探るべく、地域住民を対象に体験会を行った。
「実際に試してもらおうと、新たな課題が次々と出てくるんです。たとえば、転倒防止のスイッチを切るのが怖いという高齢者の方がいました。オフにした途端、ふらついてしまうかもしれないからと。思いもよらなかった指摘でしたが、たしかに見慣れない道具を使う側としては心理的な抵抗があるのかもしれません」
話してみても初めて気づく、開発上の盲点。技術を社会実装するためには「使ってもらう」ための改良を地道に重ねていく必要がある。
「私たち学者は、つい数値やロジックで語ろうとしてしまいます。しかし、利用者が本当に求めているのはアカデミックな『説明』ではない。どうすればみなさんの腹に落ちる言葉で自分の研究を伝えられるか。人文社会科学系の先生方の力も借りながら、その課題にチャレンジしているところです」



ライトタッチを活用した
転倒防止デバイス



環境情報研究院/
総合学術高等研究院 准教授
バウンダリ・スパー・デザイン
研究拠点 拠点長

島 圭介 SHIMA Keisuke

専門は生体信号解析、
パターン認識、リハビリテーション科学。

事例紹介 02

「本業」ではない活動こそがイノベーションを生む
— YNUリビングラボ「こらぼ」の実践

対話を通じて改善を重ねる

社会課題を解決する技術を大学から生み出すためには、「ユーザー」である市民の参画が鍵となる。その確信から、地域住民の方々と対話を研究開発のプロセスに取り入れようとしているのが、イノベーションの研究を専門とする副拠点長の大沼雅也准教授だ。先生は、開発中の転倒防止技術について研究者と市民が意見を交わし合う対話会、YNUリビングラボ「こらぼ」を島圭介教授らとともに開催している。

「技術開発を行っている最中に、ユーザーにヒアリングを行う研究者はそう多くありません。しかし、技術によって社会を変えていくためには、その技術を使う当事者である市民の方の声は欠かせません。研究者だけで開発を進めていると、どうしても視野が狭まります。実際に使う側のお話を聞いて初めて、『本当はこういうものが必要だったのか』と気づくことも多いんです」

大沼先生がこだわるのは、できる限り「多様な」声を聴くこと。転倒防止技術であれば、当事者である高齢者の方だけでなく、高齢者をケアするサポーターの方々、地域を取りまとめる立場の方々にも参加してもらえるように場を設計する。

「私のような社会科学系の研究者が技術開発に携わる意義は、コミュニケーションの種をあちこちに撒くことにあると考えています。まだ手探りの段階なので、市民のみなさんと対話しながら一緒に考え

る場を作っていきたいですね」

自分の研究を深める機会にも

イノベーションには多様性が不可欠。医療機器の開発現場におけるイノベーションをテーマに研究を進めてきた大沼先生は、そのことを強く実感しているという。

「もともと『人々はどんな時にイノベーション活動に関与するのか』という問いに関心があったんです。たとえば新たな医療機器の開発には、当然医師の協力が必要になります。多くの医師は目の前の患者さんの診断や治療に力を注ぎますが、なかには多忙ながらに機器開発を手伝おうとする医師も一定数存在するわけです。そんな医師たちは、どんなモチベーションで『本業』ではない医療機器の開発に取り組んでいるのか。それがわかれば、イノベーションを加速させる条件が見つかるかもしれません」

リビングラボに参加する市民の方々も、それぞれに本業を持ちながら、いわば「副業」的に大学の取り組みに参加している。こうした関わり方が増えていけば、新たなイノベーションが大学から生まれる可能性もさらに高まるはずだ。

「そもそもこの拠点での研究自体、われわれ研究者にとってある種の『副業』といえますよね。それぞれの専門分野を持ちつつも、『転倒のない社会を作る』という共通のミッションに取り組む。ここからどんな化学反応が生まれるのか、楽しみです」

リビングラボ「こらぼ」の様子



国際社会科学研究院／
総合学術高等研究院 准教授
バウンダリ・スパンナー・デザイン
研究拠点 副拠点長

大沼 雅也 ONUMA Masaya

専門は経営学、イノベーション・マネジメント。

研究拠点の「裏側」を聞く

島圭介拠点長、大沼雅也副拠点長



— 拠点名の由来を教えてください。

大沼：「バウンダリ・スパンニング」というのは、もともと経営学の領域で80年代ぐらいから使われている言葉で、「境界（バウンダリ）を越える・つなぐ（スパンニング）」という意味があります。僕たちは意味を少し広く捉えて、分野横断的な活動を表す言葉として使っています。

島：たしか、拠点名を考えているときに大沼先生が紹介してくれた言葉でした。ちなみに「デザイン」は、人だけを対象にするのではなく、モノを作ったり都市空間に落とすし込んだりといったアウトプットを想定していたので加えました。要するに「境界を越える何かを生み出す拠点」を目指すということでした。

— 設立の経緯を教えてください。

島：「せっかく一つのキャンパスにすべての学部が集まっているんだから、異分野同士で共同研究でもやりたいね」という話が前からあって、若手研究者同士で自主的に集まって交流していたんです。何年かして、新しい研究拠点を募集する企画が大学で立ち上がり、そこでの交流をそのまま拠点へと発展させました。

大沼：最初は本当に草の根的に始まりましたね。「専門分野以外から研究のヒントを得たい」という気持ちは、研究者であればみんな素朴に持っているものだと思います。

— 共同研究の醍醐味を教えてください。

島：分野がばらばらなので、やっぱり「言葉が違う」んですよ。たとえば研究の視点・興味や研究費の申請書の書き方ひとつとっても、それぞれでまったく異なるので面白いです。

大沼：持っている知見もさまざまですからね。たとえば倫理学を専門とする小林知恵先生から、「市民の意見を研究者が無償・無記名で活用するのは搾取の可能性もある」という指摘をいただいた時には蒙を啓かれました。ビジネスの分野では、基本的に「ユーザーの参加」を無条件に良いことだと捉えます。でも、たしかにそうした倫理的な問題が絡む可能性もある。抜け落ちていた重要な視点だなと思いました。

島：そうした分野の違いがありつつも建設的な対話が可能なのは、前提として「転倒しない社会」というビジョンを共有する仲間だからですね。

— 今後の目標を教えてください。

大沼：2023年にオープンした新湘南共創キャンパス周辺でも、リビングラボを開催できたらと考えています。近くには湘南鎌倉総合病院もあるので、実証実験をはじめさまざまな形で協力していきたいですね。

島：今はまだ一拠点での活動ですが、新キャンパスに合わせて全学的な取り組みへと発展させていければと思います。数年がかりになりそうですが、ぜひ新湘南で「転ばないまち、づくり」に挑戦してみたいです。

子どもたちの「共に生きる力」を伸ばしたい —— インクルーシブな教育環境を創る 「D&I教育研究実践センター」



「障がいの有無にかかわらず、あらゆる子どもがともに学べる教育環境を実現したい」。それが、2023年4月に立ち上げられたD&I教育研究実践センターの目的だ。「ダイバーシティ（多様性）&インクルージョン（包摂）」という名の通り、このセンターでは多様な個性をもつ子どもたちが共生できる環境づくりに取り組んでいる。現在進行中のプロジェクトは「学校施設のバリアフリー化」および「専門職支援員を育成するためのカリキュラム構築」。当事者である子どもたちの声も丁寧に拾い上げながら、未来の教育を支える土台づくりを目指している。

事例紹介 01

「誰にとっても過ごしやすい学校」をともに考える —— 附属小中学校のバリアフリー改修ワークショップ

学校施設の「当たり前」を疑ってみる

インクルーシブな教育環境を実現する上でまず大事になるのが、物理的な障壁のない学校づくりだ。自身も電動車いすを使用している高野陽介先生は、この課題の切実さを誰よりも実感している。

「私自身も高校、大学と車いすで過ごしてきましたが、学校施設のバリアフリーはまだ十分に進んでいるとはいえません。コストや実現性の問題をクリアしながら、誰もが快適に過ごせる学びの場を作りたい。それが私の課題です」

そんな高野先生たちが取り組むのが、本学の附属横浜小・中学校で行う施設改修ワークショップだ。本センターの教員やバリアフリーの専門家に加え、児童生徒たちも参加して「自分たちの通う学校をどんな空間にしたいか」を一緒に考える。

「『障がいをもつ人のためのバリアフリーを』と伝えてしまうと、子どもたちの発想は縮こまってしまいます。そこで、まずは自分たちの学校の好きなどころ、嫌いなどころを挙げてもらって、理想の学校のイメージを膨らませてもらいました。思った以上に多かったのは『明るい学校がいい』という意見です。今の学校は、子どもたちにとっては少し暗く、狭く感じるのかもしれないと気づかされました」子どもたちも最初は、与えられた学習環境が当たり前のものだと認識している。しかし、みんなで自由

に話し合ううちに少しずつ、枠に縛られない意見が出るようになる。その過程自体も重要な教育の一環だと、高野先生は言う。

逆転の発想で導入コストを削減

今後は、これまでのワークショップで出た意見を踏まえ、設計会社とも議論を重ねながら報告書をまとめていく。そこで重要になるのが、やはりコストの問題だ。

「自分たちは『持続可能なバリアフリー』を目標としています。どれだけ優れた改修案ができあがっても、コストが高すぎて導入できないのであれば意味がありません。むしろ、どんな学校でも導入できるくらいのコストの低さが理想です」

高野先生たちのもとには、「来年車いすの新入生が入ってくるが、予算も時間もなく、どう対応すればよいかわからない」といった相談が寄せられることも多いそうだ。コストの削減は難題だが、経験と工夫でなんとかなる部分も多いと高野先生は語る。

「車いすの子が階段を上るときにはどうすればいいのか。逆転の発想で、その子が居る学年の教室を1階に固定してしまうというアイデアもあります。エレベーターを設置する余裕がなくても、運用の工夫でどうにかなる場合もある。こういう実用的なアイデアを現場から拾い上げるのも、私たちの大事な仕事ですね」



施設改修
ワークショップの様子



ダイバーシティ戦略推進本部
D&I教育研究実践センター 講師

高野 陽介 TAKANO Yosuke

専門は特別支援教育、肢体不自由、
キャリア教育・職業教育。

教育と援助のスキルを兼ね備えた支援員を輩出する
—— 専門職支援員養成カリキュラムの構築

理想は「サポートしすぎない」支援員

特別な支援を必要とする子どもたちが安心して学校に通うためには、それぞれの特性にあったサポートが不可欠となる。しかし現状、専門知識を有する支援員の数は足りているとはいえない。そこで本センターでは、令和8年までに「専門職支援員養成のためのカリキュラム」の構築を目指している。プロジェクトを率いる、センター長の泉真由子教授に話を伺った。

「今の教育現場にも、特別支援教育支援員という障がいや病気等を持つ子どもの生活・学習をサポートするスタッフは存在します。ただ、教員免許の所持等が義務づけられているわけではないので、高度な支援はどうしても難しいというのが現状です。教師の負担を減らす意味でも、教育と援助のスキルを併せ持ったプロの支援員を養成する仕組みを整えなければなりません」

専門職支援員は、従来の支援員とどう異なるのか。泉教授によれば、「どこまで自分の力でやってもらい、どこから支援を行うべきなのか」を見極める技術にある。特に重要なのは「サポートしすぎないこと」だ。「何から何まで手伝ってはいは当人も成長できないし、周りとの関係も育まれない。なので、当事者が自ら必要なサポートを他者に依頼しそれを引き出すことができるような力の育成も大事なことです。このあたりの専門性をどのように定義していくかとい

うところが今の課題であり、カリキュラムづくりの肝にもなるところです」

「縦断的な研究」の実現を目指して

カリキュラム構築には、もうひとつの課題がある。それは、「専門職支援員の存在が、当該の子どもや周囲の子どもたちにどんな影響をもたらすか」をしっかりと検証することだ。

「当センターでは、効果検証をととても重視しています。専門職支援員が現場に入ることによって、本当に子どもたちにポジティブな影響があるのか。教師や職員への負担はどのくらい減らせるのか。それは導入のコストに見合った効果といえるのか。そこを説得的に示せなければ、普及もスムーズに進みません」

特に、支援員が子どもたちに与える影響については長期的に見ていく必要があると泉教授は語る。短期的にストレスがなくなったとしても、そのことが本当に子どもたちに良い変化をもたらすのかはわからない。逆に、一時的に摩擦が生じたとしても、それがコミュニケーションの力や柔軟な価値観を身につけることに繋がる可能性もあるのだという。

「教育の効果は、子どもたちが大人になるまで、つまり最低でも20年程度のスパンで縦断的に検証していく必要があります。当センターの役割は、単独の研究者だけでは難しい縦断的研究のスタートラインを用意することなのです」

成果発表を行った日本特殊教育学会第61回大会



ダイバーシティ戦略推進本部
D&I教育研究実践センター長
泉 真由子 IZUMI Mayuko
専門は特別支援教育。

研究拠点の「裏側」を聞く

泉真由子センター長、高野陽介講師



——「インクルーシブ教育」という言葉のニュアンスを、あらためてご説明いただけますでしょうか。

高野：勘違いされがちなのですが、ただ同じ場所で学んでいれば「インクルーシブ」というわけではないんです。大事なのは、個々人の特性に合った配慮がなされているかどうか。常に正しい配慮というものはないので、ケースバイケースで丁寧に考えることが大切です。

泉：インクルーシブ教育は、当事者だけでなく、その周りの子どもたちにも関わります。多様な背景をもつ他者も自分も尊重しながら折り合いをつけて一緒に生きていく力。私たちはそれを「共生力」と呼んでいます。

——バリアフリーや支援員養成カリキュラムなど、仕組みづくりを重視されていることが印象的です。

泉：現状の教育現場のマンパワーに頼らない支援を実現する必要がありますし、一過性に終わらないための持続可能性も重要ですから。どれだけすばらしい設備やカリキュラムでも、コストが高すぎて導入できなかったり、一時的にしか導入できないのなら机上の空論になってしまいますね。

高野：たとえば、うちのセンターには車いす使用者用のトイレがないんです。自分の赴任を機に改修するかという議論も出たようですが、やはりコスト的に難しかった。ではどうしているかというと、自分が使うときに「車いすの人が使用中」という札を出しています。実は、それだけでもなんとかなってし

まうんです。

——「大学職員との密な連携」がセンターの特徴だと伺いました。

高野：大学職員と教員とが、これだけ密に連携しているセンターもなかなかないのではないかと思います。ワークショップのアイデア出しから実務まで、あらゆる場面でサポートをいただいています。実は先ほどのトイレの立て札も、職員の方のアイデアなんです。

泉：立ち上がったばかりの組織なので、とにかくやることが山積みで、事務の方々がいなくなるとも回りません。頼りすぎかもしれないと思いつつ、率直に色々意見もらえるフラットな関係性をありがたく感じています。

——今後の展望を教えてください。

高野：バリアフリー改修も、専門職支援員のカリキュラムも、まだ土台づくりの段階です。さまざまなステークホルダーを巻き込んでいけるよう、まずはリサーチの成果を広くシェアしていけたらと考えています。

泉：私たちが目指しているのは、20年、30年といった単位での縦断的研究とその成果の社会発信です。附属学校や地域コミュニティの力を借りながら、未来の教育を作るプロジェクトへと育てていけるよう努力していきたいと思っています。



当事者の学生向け

Q 大学内で通称名は使えますか？

A 診断書と支援申請書がバリアフリー推進部門に提出されれば、学内の関係部署と協議の上、決定します。そうすると、学内の戸籍名を全て通称名に変更できます。部局で検討を行う際に、どの学生が戸籍名を通称名に変更するかが教職員に知られることとなりますが、教職員が他の学生に口外することはありません。現在の規定では、学内の全ての情報が通称名に変更されることとなります。一方で、成績証明書や学位記なども全て変更されるため、就職活動の際などにそのことを問われる可能性もあります。なお、現在、学生証や授業担当教員が使用する履修者名簿には、性別の記載はありません。

周囲の学生向け

Q 友人がセクシュアル・マイノリティであることを理由に、心ない言葉を言われていました。そのときに、どのように行動するのがよいでしょうか？

A 差別的な言動に気づいた時の対処方法は複数あります。「それはよくないよ」とストレートに言える時もありますが、その場の状況や相手との関係性によっては、言えない時もあると思います。自分にその時できそうなことから、少しずつやってみてはいかがでしょうか。例えば、以下のようなものが考えられます。


- 「自分はそう思わないけどな」と違う立場を表明する。
- 「え、何でそう思うの?」と疑問を投げかける。
- さりげなく、他の話題に変える。

誰もが過ごしやすい セクシュアル・マイノリティ に関する学生生活

セクシュアル・マイノリティ(性的少数者)の学生は、学生生活のどこに困難を感じているのか。誰もが過ごしやすいキャンパスを作るために、教職員や周囲の学生は何に気をつければよいのか。そんな疑問に答えるべく、ダイバーシティ戦略推進本部および学生有志によって作成されたのが「セクシュアル・マイノリティに関する学生生活Q&A」です。ここでは、本来学内からのみ閲覧可能な本Q&Aを一部抜粋し、内容を紹介します。

キャンパスをめざして ・マイノリティ Q&A 抜粋版

本Q&Aの閲覧方法
右記QRコードよりサイトにアクセスし、「【学内限定】セクシュアル・マイノリティに関する学生生活Q&A集」よりPDFファイルをダウンロードしてください(学内アクセス限定)。



Q 友達からトランスジェンダーであることをカミングアウトされました。その時は、「そっか」としか言えなかったけど、その友達になんと言えばよかったのでしょうか？

周囲の学生向け

A それで良いと思います。セクシュアル・マイノリティは普通の人です。少数者として配慮が必要、ではなくあたりまえに認められるべきことです。他人のことなので、根掘り葉掘り聞くのではなく、ごく普通の友人としてかかわって下さい。他に声をかけるとすれば、よく話してくれたねとねぎらいの言葉をかけてみてはどうですか？ その上で、このことは他の人には話さないことを伝えてもらえると、ご本人も安心できるのではないかと思います。

Q トランスジェンダーの学生が、教育実習に行く予定です。実習先の学校では、更衣室が男女別に分かれており、使いにくいのではないかと想定されます。どのように対応したら良いでしょうか？

教職員向け

A これまでに、空いている会議室を更衣室とした対応事例があります。教育実習においてどのような困難が生じるか、本人が十分に想定できないこともあります。そのため、「実習先では〇〇(トイレ、着替え、水着、呼称等)があると思うけれど、その場合はどのようにしたいか?」というように可能な範囲で、事前に本人とご相談ください。実習先に事情を説明しておいた方が双方にとってメリットが大きいかと考えますが、カミングアウトにも関連することですから、まずは、本人にどのような希望があるか早めに確認してください。



<p>窓口紹介</p>  <p>困ったら聞いてみよう 学内の相談窓口</p>	<p>なんでも相談室</p> <p>窓口：学生センター2階ホール 相談内容：学生生活を送る上での困りごと ● 平日9:00-16:00 (※12:45-13:45を除く 予約不要) ☎ 045-339-3184 ✉ navi@ynu.ac.jp</p>	<p>バリアフリー推進部門</p> <p>窓口：学生センター2階3番窓口 相談内容：修学上の調整に関する相談(更衣室やトイレの使用等) 教職員や周囲の学生に配慮をお願いしたいこと ● 平日9:00-17:00 (※12:45-13:45を除く) ☎ 045-339-3118 ✉ shougai.shien@ynu.ac.jp</p>	<p>保健管理センター</p> <p>相談内容：健康診断の日程調整についての相談 個人的な相談など、修学上の調整以外の相談 ● 平日9:00-17:00 (※12:45-13:45を除く) ☎ 045-339-3153 🌐 https://www.hoken.ynu.ac.jp</p>
--	---	--	--

異文化をつなぐ



世界 81 国から、約 800 人の留学生たちを受け入れている横浜国立大学。ここで学生たちは国籍や言語、文化の垣根を超えて互いに交流し、異文化理解を深めています。日本人学生と留学生との交流を後押しする、キャンパス内のふたつの「場」を紹介しましょう。

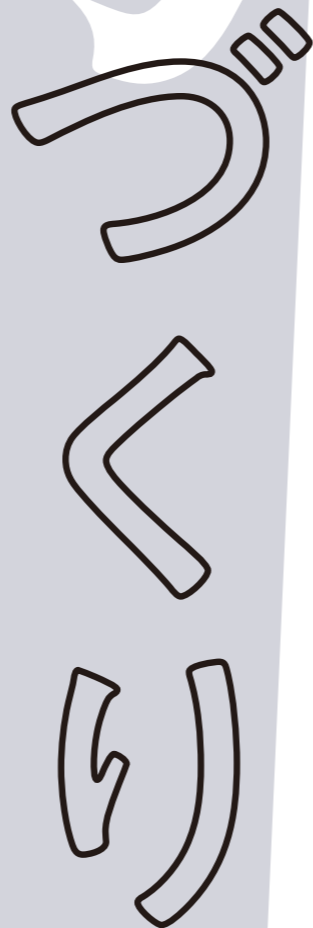
20カ国以上からの留学生が一堂に—— 常盤台 インターナショナル レジデンスでの ウェルカムパーティー



常盤台インターナショナルレジデンス外観

ウェルカムパーティーの様子

日 本人学生と留学生がともに暮らす「常盤台インターナショナルレジデンス」。ここで2023年10月に行われた新生歓迎のイベントが盛況を博していました。コロナ禍での開催自粛を経て実に3年ぶりの開催となった今回は、留学生と日本人学生を合わせて70名ほどが参加。会場に用意された料理や飲み物を手に会話を楽しみました。主催者によると「参加している留学生たちの出身国は、東南アジア、アフリカ、中東、ヨーロッパ、南北アメリカなど20カ国以上。宗教や食文化も多岐に渡ります。どの学生も楽しめるように、和食や洋食だけでなくハラルフードやベジタリアンフードなども用意しました」とのこと。春入学と秋入学のタイミングに催されるウェルカムパーティーは、新たに入居した留学生たちが日本の暮らしになじみ、交友関係を広げる貴重な機会となっています。



2 023年4月、中央図書館1階メディアブース106に「グローバル・コモンズ」がオープンしました。ここは学部や大学院、日本人学生や留学生といった枠を超えて、誰でも利用できる交流スペースです。「面識のない学生どうしでもコミュニケーションを取りやすいように」と、本棚やソファ、テーブルなどが置かれ、リラックスできる空間に。畳のスキップフロアは、留学生たちが日本の文化を感じられるようにとの思いから設けられました。「グローバル・コモンズ」では、外国語での会話を楽しむ「トークタイム」や、さまざまな国の文化を紹介する「グローバル・カフェ」などの学生交流イベントも定期的な催され、異文化交流の場になっています。



グローバル・コモンズ内観

異文化交流が広がる リラックス空間 グローバル・コモンズ

YNU PEOPLE



挑戦し続ける横浜国立大学の「人」。

横国が誇る研究者をクローズアップする、〈YNU MAESTRO〉。
学生たちのベンチャー精神に迫る、〈VENTURE SPIRIT〉。
インタビューを通じて、横国の「今」をお届けする。

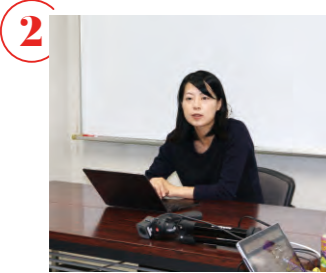


「置き配」から「宇宙」まで。
法学の目で新たな輸送の仕組みづくりを。

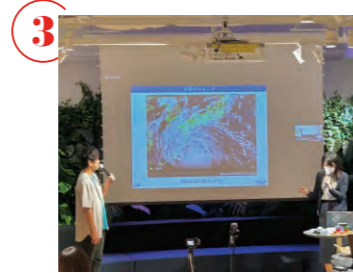


国際社会科学研究院 教授
笹岡 愛美
SASAOKA Manami

3 KEYWORDS
笹岡先生をひもとく
3つのキーワード



2 「海事法研究」の授業風景
常盤台キャンパスの4つの大学院が連携して、異分野融合の研究を実践する「先進実践学環」。その中で笹岡先生が教鞭を執るのが「海事法研究」の講義だ。受講者の半数は法学系、半数は船舶工学を研究している学生たちだという。



3 台風科学技術研究センター(TRC)の公開講座「台風専門学校」にて台風に関わる研究者を招き、台風について楽しく学ぶことを目的とした公開講座「台風専門学校」。笹岡先生はここで「台風と法」をテーマに登壇している。本講座は2022年には延べ1,100名の申し込みが集まるなど大人気を博している。



1 宇宙ビジネスに関する必読書『世界の宇宙ビジネス法』
宇宙ビジネスに参入する上で必須となる、各国の法制や国際的な法規制について網羅的かつ体系的に解説した、宇宙ビジネスに関わる人々の必読書。

引渡しの完了はどこから？
「置き配」導入の舞台裏で

「不在時に届いた荷物を、玄関先などに置いてもらう『置き配』は、ここ数年で急速に普及したと思いませんか？ 実はこの置き配を実現させるためには、法的な壁があったのです」と語るのは、運送取引のルール作りに関わってきた法学者、笹岡愛美先生だ。物流量は年々増え続け、再配達にかかる運送ドライバーの負担も増加の一途をたどっている。この課題を解決しようという動きはかねてからあり、置き配も長年に渡って議論の俎上に載り続けていた。2024年4月から働き方改革関連法が運送ドライバーにも適用され、深刻な労働力不足が懸念されている。この「物流2024年問題」の解決のために、置き配の社会的な普及は不可欠だった。

「不在だったら再配達をしてもらえばいい」といった従来の発想だと、物流システムが回らなくなります。ですから、置き配を実現させるために、手渡しをせずとも引渡債務を完了したと評価できるようにするための、法的な整理が必要でした」

引渡しとはどういう現象なのか。受取人の不在時に「きちんと届けること」と「捨て置くこと」との間にはどんな違いがあるのか。「検討が重ねられた結果、受取人の同意のもと、指定された場所に荷物を置くことで『引渡債務は履行完了した』と評価されるというルールが、運送約款にまとめられています。今や当たり前のように浸透している置き配は、法律家による試行錯誤の賜物なのだ。

長年にわたる研究が
輸送に関わる立法へと繋がった

そもそも、笹岡先生が運送取引のルール作りに関わってきた背景には、先生が長年取り組んできた研究があった。

「荷物の受取人である『荷受人』の法的地位に関する研究です。宅配便の送り主と運送業者との間で締結される運送契約において、契約不履行の場合に送り主が運送業者に対して請求できる損害賠償金の額は、30万円が上限とされています。一方、受取人である荷受人は契約の当事者ではないので、この制限を適用することが困難でした。安価で全国まで運ぶことを前提とした宅配便のシステムを成り立たせるためには、荷受人を契約ルールに拘束するための法的な整理が必要となります。このような研究を進めていたら、ちょうど運送ルールを現代化するために商法が改正されることとなり、私も2年間法務省で立案作業に関わらせていただきました。まったくの偶然ですが、自分の研究が立法へと繋がったことは嬉しかったです。」

以来、海運、陸運、空運などさまざまな運送取引の法整備や法ルールの明確化に尽力してきた。現在は宇宙における輸送にも関心を持っている。「宇宙空間への輸送には多大なリスクが伴います。そのため、現段階の運送ルールでは、ロケットが打ち上げれば、実際には目的地に届かなくても運送債務は履行されたものとなっています。しかし、将来的に技術が発展し、より確実な輸送が実現できるようになれば、取引ルールも変わっていくべきでしょう」

分野の垣根を超え
イノベーションの旗を振る

運送取引は、自動化や電子化などの技

術革新とも親和的だ。さらに近年では、研究開発と法整備とを二人三脚で進める動きが広がっているという。目下、本学の台風科学技術研究センター (TRC) で進められている台風制御研究もそのひとつ。目標は、2050年までに台風の制御技術を社会に実装すること。その目の中心に居るのが、笹岡先生らの研究グループだ。

「元々は、気象学や工学の専門家ではない社会科学の研究者としてやや外側から意見を述べる立場として参画したんです。ところが今ではプロジェクト全体のハブのような役割も担いつつあります」と先生。分野横断的なプロジェクトにおいて法学者が担う役割は拡大している。技術者や政策担当など立場の異なる参加者の意見に耳を傾け、用語の定義を揃え、皆が同じ前提に立って議論できるように交通整理することは、法学者の得意分野なのだ。

「大切なのは、自分の専門領域を超えて幅広い分野の知見や考え方を学ぶ姿勢だと思います。台風制御は、これからの気候・気象と共生していくための選択肢のひとつとなる可能性があります。社会的に極めて意義のある研究開発プロジェクトを、各分野の第一人者たちとともに進めさせていただけることに大きなやりがいを感じています」

PROFILE

高知県出身。専門は商法・会社法。運送取引における荷受人の法的地位に関する研究から始まり、人や物の輸送に関わる取引ルールの明確化に尽力してきた。近年では、宇宙分野や気候・気象工学分野のような科学技術の社会実装に関わる法的な課題にも関心を持っている。主な著書に『世界の宇宙ビジネス法』。2018年度横浜国立大学ベストティーチャー賞、2022年度横浜国立大学外部資金獲得研究者表彰受賞。



「壊れ方」を見極める技術で、 インフラの高齢化に立ち向かう。



都市イノベーション研究院 准教授

田村 洋

TAMURA Hiroshi

3 KEYWORDS

田村先生をひもとく
3つのキーワード

2



実は研究者も愛用？
市販の橋の模型。

学生に鋼橋の構造を説明する際、よく使うという精巧な橋の模型。研究用に作成したものかと思いきや、なんと市販の鉄道模型の一部なのだとか。研究者から見ても相当リアルにできているらしく、玩具業界の技術の高さに驚かされる。

1



初めて指導した学生から
もらったお土産のお酒。

博士課程を終え、東北大学で教鞭をとり始めたのが2012年のこと。初めて指導した学生たちが、卒論を終えた後の沖縄旅行のお土産としてくれた日本酒の瓶を、今でも研究室に飾っている。「教員になって学生と研究の達成感を共有できるようになりました。この時のお酒は、本当においしかったですね。」

3



「物を壊す」実験のための
万能試験機

物体の破壊現象を理解するためには、実際に物を破壊できる装置が必要になる。土木構造実験棟に設置されているこの巨大な万能試験機は、2000kNの力で物体を圧縮および引張でき、鋼やコンクリートなど様々な材料で作られた構造物の破壊現象を検証することができる。

50年前に架けられた鋼橋を 止めることなく診断する

人々の生活を支える重要な存在である鋼橋。その内部には水道やガス、通信ケーブルといった各種インフラが通っており、単なる交通手段には留まらない機能を担っている。一方で、その多くが高度経済成長期に建設されており、「高齢化」が大きな社会課題となっている。その解決に尽力しているのが田村先生だ。

「鋼橋は人々の日常を支える重要なインフラなので、万が一にも事故が起きてはなりません。とはいえ、無闇に架け直しては莫大なコストがかかるのも事実。適切にケアしながら長く使い続け、壊れる直前に架け直すのが理想です。そこで重要になるのが、診断の技術なのです。」

橋の状態がどのくらい変化しているのかを正確に診断するのは、実は難しい。なぜなら、鋼橋の寿命は一般的に50年以上。建設当時は、50年後にどこがどのように壊れるかなど想定しようがないからだ。また、橋の「内部」で何が起きているのかは、外からの目視では確かめようがない。そこで専門家の「診断」が必要になる。

「たとえば超音波や電磁波、サーモグラフィなど、さまざまな計測技術を用いて異常を早期に捉えようとする工夫があります。橋を止めてしまうと大きな影響が出てしまうので、壊さず透かして診ることが有効なのです。MRIでの身体検査に似ているかもしれません」

研究者だからこそ扱える 「破壊」という現象

計測技術は日々発展し、橋においても

新たな発見が次々となされている。しかしそれらを適切な診断や修復へと繋げるためには、異常を適切に分類し、将来のリスクを予測するための「理論」も必要になる。その一例が、田村先生の専門でもある破壊力学だ。

「破壊の定義も色々ありますが、何かの作用によって、人工物の機能が損なわれ、元に戻らなくなることを捉えることもできます。主に力の作用に注目してこの現象を数理的に扱う理論体系が破壊力学です。たとえば、橋の内部で数cmの長さの亀裂が発見されたとします。この亀裂がどれだけ危険なものなのかどうかは、力学的な知見がなければ判断できません。小さな傷でも、重大な事故を招く危険な損傷かもしれませんし、逆に調べてみたらもうしばらく様子を見てよいと判断されるケースもあります」

部材が複雑に組み合わせられてきた巨大な構造物、それが鋼橋だ。個別の損傷がどのような形で全体へと影響を与えているのかは、構造理論に精通していなければ正確に評価できない。特に破壊はそう頻繁に起こる現象ではないため、現場の熟練技術者が必ずしも詳しいわけではないという。

「破壊について知るためには、物を壊す実験を何度も繰り返したり、それをコンピュータでシミュレーションしたりする必要があります。それを大学などの研究機関以外で行うのは現実的に難しいですね。現場を熟知した実務者と背後のメカニズムに精通した研究者が手を取り合うことが大切です。私たちが取り組んでいるのは実務のための研究ですから、大学に属しているからこそできる貢献を意識したいと思っています」

ひとつの答えを得た爽快感を 味わえるのも土木という分野の魅力

「ある意味では、今も卒業論文の延長で研究が続いている」と語る田村先生。実は学部時代も、現在所属している研究室で学んでいたという。高校時代、建築か土木かで悩んだすえ、土木の道を選んだ。

「もともと大きなものへの憧れが強かったんです。そのなかで土木を選んだのは、なぜここに柱が必要なのか、なぜこの構造でなければならないのかをロジカルに説明できるところに魅力を感じたから。物理や数学の知識を駆使してひとつの答えを導けると爽快感がありますね」

研究をしていて一番楽しいのは、一見関係がなさそうな理論を応用して新たな現象の解明に貢献できた時だという田村先生。最近では破壊力学の理論を、ボルトの継手に応用することに取り組んでいるという。

「ボルト継手内部の摩擦面のすべりも破壊の一種と捉えてみると、色々見えてくるものがあるんです。自分が貢献できる場所は、思った以上にたくさんあるのかもしれないと感じましたね。自分にしかできないアプローチで診断の現場に貢献できるよう、これから色々な分野にアンテナを張って技術と理論を磨き続けていけたらと思います」

PROFILE

埼玉県出身。専門は土木構造。学部時代より、鋼橋の構造解析をテーマとしている。特に物体の損傷度を評価する破壊工学のアプローチを用いて、高齢化した鋼橋の損傷具合を診断する研究に取り組む。2020年度横浜国立大学ベストティーチャー賞、2021年土木学会論文賞を受賞。

子どもたちに好奇心の種をまき、 科学の楽しさを伝えたい。

各地の学校をまわって出張授業や理科実験ショーを行う「CurioSeeds」。
現役の博士学生が、なぜ今、子どもたちへのアウトリーチを始めたのか。
その背景や活動の手応えを CurioSeeds 代表の飯島瑞稀さん、メンバーの杉本結花さんに伺った。



理工学府 化学・生命系理工学専攻
博士課程 2年

飯島 瑞稀

IIJIMA Mizuki

理工学府 化学・生命系理工学専攻
博士課程 3年

杉本 結花

SUGIMOTO Yuka

小・中・高校生を主な対象に 科学への興味が湧き出す授業を

現役の理系博士学生による出張授業を中心に活動するサイエンスコミュニティ、CurioSeeds。飯島さんがこの団体を立ち上げたきっかけは、家庭教師先の生徒との会話だったという。

「夏休みなのに友達とも遊ばず、ほと

んど家にいる子どもが多いと聞き、以前より遊びの機会が減っていることに驚きました。同時に子どもたちの学力低下や理科離れといった問題も知り、自分にできることは何かないかと考えました」

専門分野を活かし、遊びを通じて科学の楽しさを伝えることができるかもしれない。そんな想いで仲間を募り、2019年に CurioSeeds を発足させた。

これまでの活動では、五感を使うフィールドワークや仮説検証など科学的な思考プロセスが学べるワークショップ、理科実験ショーなどを、授業や特別イベントの一貫として開催してきた。

また、高校生や大学生の進路相談・キャリア教育にも力を入れているという。「進路選びでは安定の確約＝正解を求める傾向を感じます。だからこそ現役の博

MY MEMORY



1 新たな企画の第一歩は話し合いから。メンバーたちがアイデアを持ち寄る。



2 授業の準備は念入りに。予行練習を重ねる。



3 「葉っぱ図鑑づくり」のフィールドワークでは、さまざまな形の葉っぱを見つけて楽しんだ。



4 夏のリコチャレ2023「博士と一緒に！夏休みの自由研究プロジェクト」にて。オリジナルの香水を作った。

士学生の体験談を語り、間違っただ道などないので自分の興味があることを軸に考えよう、と伝えています」杉本さんは、その道が理系進学へとつながっていればうれしいと付け足した。

育てたいのは「考える力」 ワクワクを学びの原動力に

CurioSeeds のパーパス（存在意義）は「好奇心の種をまく」ことだと飯島さんは強調する。

「子どもたちに、世の中には面白いものがたくさんあるのだと知ってほしくて。特に小学生には、ワクワクするような科学の不思議や感動を味わってもらうことを大切にしています」

例えば、小学一年生と取り組んだ「葉っぱ図鑑づくり」のフィールドワークでは、子どもたちが好きな葉っぱを拾い、植物を専門とする博士学生と一緒に分類。葉の形の違いや生息場所について考えた。最後はクラスで一つの図鑑にまとめ、自然の奥深さを学んだという。先生からは「普段落ち着きがない子も興味を持って取り組んでおり、この授業をしてよかった」という声をもらった。

また、液体の色が変わるなど、身近な疑問やテーマを扱った理科実験ショーも好評だ。不登校の子どもたちが通うフリースクールでは「物静かだった子が、

自分から挙手をしていたと感動した」と感謝され、日本語学校では「言葉の壁を越え、全員が前のめりで楽しんでいた」と驚かれたという。

活動に参加する博士学生たちは、決して子どもたちを答えに誘導しない、と杉本さん。

「正解のある勉強とは違い、物事を疑う力や自分で答えを考える力を育みたい。変化し続ける情報化社会では、自分の頭で柔軟に考え抜く力が必要ですから」博士学生たちも一緒に考えるスタンスで臨んでいる。

博士と社会をつなぎ、 未来の博士を増やす活動に

CurioSeeds の活動は、杉本さんにとっても大きな価値を持つという。

「博士課程まで進むと、周りには女性はおろか同期も先輩もほぼおらず、孤独で生きづらさを感じていました。CurioSeeds では、社会や仲間との繋がりができるので、視野が広がり、悩みを解消しやすくなりました」

少数派ゆえに情報不足などの課題を博士学生が抱える中、CurioSeeds は彼女らの研究生生活を支える役割も果たしている。

現在、活動資金はクラウドファンディングで募集している、と飯島さん。

「できるだけ参加費は無料にし、お金の有無に関わらず、教育機会を平等に設けたい。この一年間は大学のベンチャー支援制度に採択され、資金を含め多くのサポートを受けてきましたが、今後は広く支援を募り、活動を継続させたいです」集めた資金は協力者への謝礼としても活用する予定だ。研究を伝える活動に価値があることを示し、博士と社会との接点を増やしてもらいたいからだという。

「活動に参加する博士が増えることで、博士が身近な存在になり、憧れの職業になるくらいイメージを上げたいですね」杉本さんが博士の未来を描けば、飯島さんは日本の未来を描く。

「科学の楽しさを知った子ども達が研究の道に進み、博士学生になっても安心して研究できる。CurioSeeds の活動が、未来の日本の研究開発力の向上にも貢献できればいいと思います」

About Us

小・中・高校で出張授業を開催する「CurioSeeds」

理工系の博士女子学生6名がコアメンバーとして在籍するサイエンスコミュニティ。名前の由来は好奇心(Curiosity)+種(Seeds)から。各種学校・団体のほか、オンラインでも活動を展開している。

観る人も、プレーする人も魅了する。
このスポーツとともに成長したい。

大学届出団体のキャップ野球サークル「SOUNDS ON BEACH」。
2023年3月には「東西統一蓋祭」で優勝、全国32チームの頂点に輝いた。キャップ野球の特徴は、誰もが始められる気軽さと変化球の多彩さ、スピード感など。代表の戸澤さんと広報の矢口さんに魅力を伺った。



代表: 教育学部 学校教員
養成課程理科専門領域
2年

戸澤 玄

TOZAWA Hajime

広報: 教育学部 学校教員
養成課程技術専門領域
3年

矢口 大樹

YAGUCHI Daiki

「東西統一蓋祭」で
念願の優勝を果たす

「打者の手元で浮き上がったり、大きく曲がったりする変化球と、球速が体感200キロ超となるスピード感が面白い」ペットボトルのキャップをボールに用いる野球型競技、「キャップ野球」。キャップを指で弾いて遊ぶ「キャップ投げ」か

ら派生したこのスポーツの魅力を代表の戸澤さんはこう語る。

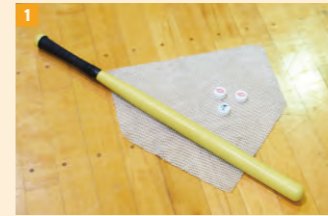
大学届出団体の「SOUNDS ON BEACH」は、キャップ野球黎明期の2019年に発足。以来、部員拡大とともに着実に力を伸ばし、2023年3月には一般社団法人「日本キャップ野球協会」主催の「東西統一蓋祭」で念願の優勝、全国32チームの頂点に立った。広報の矢口さん

は、試合で繰り広げられた同級生たちの活躍を振り返る。

「全員がオールラウンダーになれるよう努力を積み重ねてきたメンバー。シーズンゲームとなった決勝戦で見せた集中力は素晴らしかった」

ルールは野球と似ている。守備はバッテリーを含む4人で、指名打者を加え計5〜6人で1チームを構成。打球がヒッ

MY MEMORY



1 キャップ、バット、ベース。この3つさえあれば始められるのがキャップ野球の魅力。



2 練習風景を撮影。動画の制作は広報活動の要。



3 ピッチングの練習。フォームは十人十色。



4 新入生歓迎の立て看板。チームを育て、競技人口を増やしていくための大事な入り口。

トゾーンを超えると単打、フェンスに当たると2塁打などと規定し、マウンドからホームまでの距離は野球の約半分。広いグラウンドも用具の準備も不要で、競技としての間口が広い。戸澤さんによると、部員の半数近くが野球の未経験者だ。「本当の意味で『経験者』がゼロなのがキャップ野球。引け目を感じず、誰でも始めやすいのが魅力です」

SNS時代の追い風とともに、
大学生を中心に人気が拡大。

キャップ野球は、2017年に京都大学の学生が考案したという。SNSにアップされた試合の様子が話題となり、特に大学生の間で人気が出ると、関西や関東の大学でサークルが発足し始めた。現在は約30の大学で活動が行われている。戸澤さんも矢口さんも、SNSがきっかけでキャップ野球を始めたそうだ。「動画を見て『自分もあんなに曲がる球を投げたい』と興味を持った僕たちのような学生が、友達を誘い合い気軽に始めた結果、ここまで拡大したんです」実際の動画を見てみると、大きく曲がる変化球とスピード感に見入ってしまう、確かに好奇心を掻き立てられる。「SOUNDS ON BEACH」もYouTubeを新入生の勧誘目的で始めたが、今では

部の軌跡を残すことと、キャップ野球自体の普及にも焦点を当てて運用。現在では、フォロワーの数も1万人を超え、より広い世代に興味を持ってもらえるような動画更新を続けている。

新たなスポーツ「キャップ野球」の
強豪校として勝ち続けたい。

気軽に始められることに加えて、開拓の余地が充分にあるところがキャップ野球の奥深さだと、二人。「指で弾くだけの投げ方もあれば、ボーリングのような投げ方もある。ほんの少し角度を変えるだけで曲がり方は大きく変化するし、ストレートの投げ方だけでも十人十色です」

ピッチャーである戸澤さんは日々、動画などで研究を重ね、レベルアップを目指している。

一方で矢口さんは勝負の分かれ目は「集中力」と断言。キャップ野球を始めた頃は、まずキャップを目で捉えることができないそう。マウンドからホームまでの距離が短く、体感スピードがとてつもなく速い。打者にも野手にも高い動体視力と反射神経、そして集中力が要求されるが、そこが面白いと矢口さんは言う。広報や会計もこなす矢口さんは大会運営などにも尽力。競技層は大学生で、必然的に裏方も大学生が担っているのだ。

他大学や外部との交流も不可欠で、コミュニケーションなどにおいて、自身の成長を感じているという。

「飽きっぽい性格でしたが、継続や集中を学びました。キャップ野球は、人の輪や新しいことに踏み出せなかった自分を変えてくれました」

戸澤さんには代表としての思いがある。「先輩が築いた活動を引き継ぎ強豪校として活躍を続けながら、キャップ野球の人気拡大に貢献したいですね」

About Us

春の全国大会優勝、
キャップ野球サークル

大学届出団体。2019年に発足し、現在は部員90人まで拡大。関東強豪校の一角を担う実力校で、週3〜4回学内体育館などで練習している。初心者大歓迎。すべての大会で優勝を目指す。

制御工学の面白さに魅せられて。

自動運転技術の開発に繋がる横国での学び。

自動車の安全運転支援システムの開発者として活躍する、卒業生の中村堯子さん。在学中に制御工学の面白さに目覚め、探求した経験が、現在のキャリアを方向づけたという。「大学での講義が人生の転機になった」と言い切る中村さんから、今の仕事にどのように向き合い、大学での学びがどう息づいているのかを伺った。



本田技研工業株式会社 研究開発部門
出身：理工学部 数物・電子情報系学科
工学府 物理情報工学専攻

中村 堯子

NAKAMURA Akiko

「安全に停まる」というニーズに 技術で応える

本田技研工業株式会社（以下、本田技研工業）に入社して5年目の中村さん。現在は、先進の安全運転支援機能の開発部署に所属し、自動駐車機能システムの研究開発を進めている。

「自動車の運転において、走行はもち

ろんですが、駐車もとても重要な要素です。難易度が高い駐車環境での事故は実はとても多い。この技術で少しでも交通事故を減らせたかと考えています」

そんな中村さんがメインで担当しているのは、自動駐車機能の安全性が担保されているかを分析する、「安全分析」と呼ばれる領域だ。安全運転支援機能を使用する際に起こり得る故障や事故を想定

し、その原因を取り除ける設計になっているかどうかを検証する。仕事では、本学での学びが活かしていると中村さんは話す。そのひとつが分析結果を上層部に報告する際だ。

「横国では英語の授業でのプレゼンテーションをはじめ、教授への研究発表、学会発表などの機会が多くありました。そこで自分の考えをしっかりと相手に伝

MY MEMORY



初めてのニュージーランドの国際学会へ。緊張した面持ちで。



大学から始めたアコースティックギターのサークル。4年生最後の学祭で演奏し、有終の美を飾る。



研究室の親睦会にて。大学4年生はここで初めて自分の研究テーマについて発表する。



制御工学の講義で使っていた教科書。基礎から応用まで網羅されたこの本を、今でも職場において読み返している。

える力を鍛えられたと感じます」

初めて受けた制御工学の講義が ターニングポイントに

もともと理系科目が得意だった中村さん。本学理工学部に進学したのは、化学系分野の仕事をしている父の「これからは電気、電子、情報系の時代だ」という言葉があったからだという。

「地方出身なので都会に出たいという気持ちもありました。初めてキャンパスを訪れた際、広くて緑がたくさんあり、落ち着いて学べそうだと感じましたね」

1年次から学部ごとに専門科目があったが、高校とのギャップに戸惑うことはなかった。「一般教養の授業が多かったからか、高校での学びと地続きに感じられ、すんなりと大学の授業になじめました」クラスメイトと過ごす時間がたくさんあったことは、地元を離れて暮らし始めた中村さんにはうれしかった。

「4年生から研究室に入りますが、3年生のとき、第1回目の制御工学の講義でその面白さに魅せられ、すぐに研究室を訪問しました。指示した処理通りに論理的に描かれていくブロック図に心が動き、自分もやってみたくと思ったんです。そのまま制御工学の研究室に入りました」

研究室でのテーマは「宇宙で使うロ

ボットの制御」。宇宙が好きな中村さんが教授に申し入れ、思いが通じた。ここから3年間は、この研究に没頭して論文を書き上げ、国際学会や論文誌に提出するなど充実した時間を過ごした。

本田技研工業への入社を決めたのは、「設計した通りにものが動き、それがデータとして出てくる面白さ」を仕事でも感じられそうだったからだ。

「就職活動の際、“制御工学での学びを活かしたい”と伝えると、その思いを本田技研工業は“いいね！”と受け入れてくれて。ここでなら夢中で取り組んだ研究やそこで得た知識を活かせると感じました」

会社のデスクには、今でも学生時代に使っていた制御工学の教科書を忍ばせている。入社当時は見返しながら仕事を進めることもあったと、中村さんは当時は振り返った。

学生時代には多様な人と出会い、 語り合っていた

今後の目標は、「とにかく今の開発を継ぎ、世に出ていく技術として確立させることだ」と中村さん。「成果が目に見える形になるのは、この仕事の醍醐味。各部署と連携しつつ、チームでこれを達成したいですね」

ひとつの機能を実装するためには、何

千人もの人とコミュニケーションを取り、信頼関係のもとに開発を進める必要がある。だからこそ学生時代には、たくさんの人に出会い、語り合っていたと中村さんは言う。

「横国のキャンパスには、いろいろな人が集まっています。私はサークル活動を通して、学部や学年を越えたつながりを持つことができ、新たな発見や気づきをたくさん得ました。ぜひ皆さんも、多くの人と関わり、多様な価値観に触れ、興味を持った分野にはどんどん足を踏み入れてみてください。きっとそれが人生にとって、大切な経験になるはずです」

Job Introduction

自動駐車機能の 研究開発で運転をより 安全、快適に

大学、大学院で身に付けた制御工学の知識を活かし、本田技研工業にて安全運転支援システムのひとつである自動駐車機能の研究開発に携わる。主な担当は安全分析。

横浜国大の名物授業!

「あの授業は絶対に履修したほうがいい!」と学生の間でも評判の授業があります。シラバスからは読み取れない、その魅力に迫ります。

ジェンダーと教育

授業名

ジェンダーはどこから? 教育のあり方を問い直す。



授業内容について教えてください。

ジェンダーとは「身体的差異に意味を付与する知」(J.W.Scott)と定義される概念で、社会的・文化的につくられる性ともいわれます。学校教育においても「男子・女子とはこういうもの」という思い込みに基づいて、無意識のうちにジェンダーが再生産される可能性があります。一方、ジェンダーに対する意識や行動を変える力があるのもまた教育です。本授業では、学生が自身の経験を振り返り、成長の過程でもたらされるジェンダーの影響について考察。ジェンダーに関わるアンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)を問い直し、今後の教育のあり方について考えます。

授業に対する学生の反応はいかがでしょう。

「答えがひとつではない問い」に対し、各自が考える。このスタイルを重視しています。「なぜ」を掘り下げていくなかで、無意識のジェンダー・バイアスを自覚する学生も多いようです。教育が社会の中での役割づくりや自己形成に深く関わっていることを改めて認識し、自身と向き合う良い機会になっていると思います。



堀内 かおる
HORIUCHI Kaoru
教育学部/
教育学研究科
教授
家庭科教育学・
ジェンダーと教育
(Gender Issues in Education)

学生が各回のテーマを自分事として捉えられるように、授業前には毎回アンケートを実施。ジェンダーに関わる学生のエピソードが多数寄せられることでさまざまなジェンダーの課題が浮かび上がります。授業では対話を促すべく少人数でのディスカッションも活用。他者から新たな気づきを得られ、視野が広がります。

原価会計論

授業名

企業経営に欠かせない 「原価」の仕組みに迫る。



授業内容について教えてください。

この授業では、企業経営に欠かせない原価計算の仕組みを習得します。企業の目的は利益の追求ですが、そのためには収益(売上)を上げるか費用を下げなければなりません。このうち費用に深く関わるのが原価計算。原価の構成がきちんとわかれば、製造活動の効率を高めて原価を下げ、より大きな利益を得られます。ここでは受注生産に適した「個別原価計算」と少品種を大量生産する場合に便利な「総合原価計算」、ふたつの計算方法について学びます。



高橋 賢
TAKAHASHI Masaru
経営学部/
国際社会科学研究院
教授
管理会計・
原価計算

授業に対する学生の反応はいかがでしょう。

ややもすると公式の暗記に終始しがちなこの科目。「なぜこのような計算になるのか」「この計算が経営管理にどう役立つのか」にまで踏み込むことで、多くの学生たちは腑に落ちるようです。例えば、新商品の価格が発売時から徐々に下がっていく理由も原価計算と深く関わっています。発売後しばらくは生産技術が未熟であることから不良品の頻発によってコストがかかり、商品の価格を押し上げる。この関係を知ることで、原価計算の「仕損費の処理」という単元がよく理解できるようになるのです。

企業が活動していくために、製品の原価を知ることとはとても重要です。学生のみなさんが将来、原価計算を生きた学問として使いこなせるよう、計算式にとまらずその目的や理屈まで納得できる授業を心がけています。

物質科学

授業名

身の回りの現象から 物質の正体を解き明かす。



授業内容について教えてください。

物質科学は、これから大学で修める化学系の学問の入門科目です。物理化学、有機化学、分析化学、無機化学、高分子化学、化学工学などのベースになります。高校で学んだ化学や物理の知識を出発点として、多様な物質の原子・分子レベルでの成り立ちや、それが目に見えるスケールの「材料」にどう結びつくのかを紐解きます。物質に対する捉え方を、高校レベルから大学レベルにアップデートすることがこの授業の目的。そのために、多結晶体や粒界、非晶性固体、高分子といった物質にまつわる重要な事柄について、身近な現象や製品を例に解説していきます。



上野 和英
UENO Kazuhide
理工学部/
工学研究院
准教授
高分子化学・
電気化学

身の回りの現象に目を向けるとより理解しやすくなります。例えばアイススケートではなぜ滑るのか。ゴムは伸びた後になぜ元の形に戻るのか。ガラスは本当に固体なのか。こういった身近な「なぜ」を、新たな知識を加えながら紐解きます。最先端の研究内容にも触れることで、基礎研究に興味を持ってもらえればと思います。

横国生

ランチ事情

LUNCH SITUATION OF
YOKOHAMA NATIONAL
UNIVERSITY STUDENTS

「ここは本当に横浜？」—— オープンキャンパスで訪れた

高校生たちからそんな声が聞こえてくるほど、

のどかな自然に囲まれた横浜国大常盤台キャンパス。

たしかに、どの駅からも少し歩くと、繁華街に近いわけでもない。

気軽に入れるファストフードさえ、大学の近くには見当たらない。

となると、横国生はいったいどこでランチをとっているのだろうか。

もちろん学食や生協はいつも賑わっているけれど、

10,000人近い学生の胃袋をすべて満たせるとも思えない。

きっとどこかに、隠れたランチスポットが存在するはずだ。

その答えを探るべく、今回は3名の横国生にインタビューを行い、

それぞれのランチ事情を教えてもらった。

そこから見てきたのは、キャンパス内外に存在する

意外にも豊かな食文化だった——。

CASE_01 インドネシアからの留学生 アリシャさんのランチ事情



インドネシアから留学してきた都市科学部のアリシャ・サバイラさん。留学自体は2020年からスタートしていたものの、コロナ禍のために1年半はオンライン授業に。2022年ようやく入国が解禁され、現在はキャンパス近くでひとり暮らしを満喫中だとか。家で自炊もしつつ、学食やカフェもたまに利用するというアリシャさんに、お気に入りのランチ時間の過ごし方を聞いてみた。



手作りで故郷の味を再現
アリシャさんお手製のお弁当。ひとり暮らしになってから作ることが増えたという。たまに食べたくなる故郷の味も、自分で作れば再現できる。ちなみにインドネシア料理に使う魚醤などの調味料は、関内の街に行くのと手に入るのだから。



学内で販売されている「和田べん」もたまに利用する。これはインドネシアを代表する料理、ナシゴレン。アリシャさんいわく、味も本国のものに近いらしい。

ナシ + ゴレン
↓ ↓
米 焼く



天気の良い日は野音でピクニック
キャンパスの中心に位置する野外音楽堂、通称「野音」も、アリシャさんのお気に入りスポットのひとつ。天気の良い日は、芝生に座ってお弁当を広げ、ピクニックすることもあるそう。図書館での勉強に疲れたら、1階のカフェでコーヒーを買って、野音のベンチで一休みするのも悪くない。



暖かい季節は中央図書館前のテラスもおおすすめのランチスポット。授業終わりは混雑するので、空きコマの時間を過ごすのに使いたい。



図書館は「第二の家」
授業がない時間はひたすら図書館にこもっているというアリシャさん。勉強や読書はもちろん、映画を見たリグループワークをしたりするのも便利だという。あまりに居着きすぎて、友達からも「図書館が第二の家なんだね」と言われるほど。



Favorite!
中央図書館1階のカフェ「shoca.」のカフェラテ。
取材中、直前の授業で知り合った人とばったり遭遇。

CASE_02

研究に学生団体に大忙しの 瓜生さんのランチ事情



大学院進学を控える都市科学部4年の瓜生幹久さん。あとは卒業研究を残すのみだが、3年生のときは授業数が多くて大変だったという。そんなときによく利用していたのが、キャンパス内にやってくるキッチンカーだ。学食に比べると少しお高いけれど、手軽な上に良い気分転換にもなる。特にエスニック系のメニューがお気に入り、一時期は毎週のように食べていたのだとか。



お気に入りメニューの「ブルドボークオーバーライス」(¥700)。自分ではなかなか作れないものが食べられるのもキッチンカーのいいところ。



ランチタイムの行列はご愛敬

お昼時になると営業を開始するキッチンカー。2限が終わると、各教室から出てきた学生たちで大賑わいとなる。瓜生さんに「どんな時にキッチンカーで食べたくなるのか」と尋ねると、「一言でいえば気分です」と素直な回答。たしかに、たまに無性に食べたくなるタイプのメニューが並んでいる。



ある日のキッチンカーのメニュー。いろいろなトッピングが選べるのも嬉しい。

キッチンカーが来るのは、中央図書館前メインストリートと理工学系研究図書館前。曜日によって内容も変わり、毎日新鮮な味が楽しめる。外観もそれぞれ工夫が凝らされているので、お気に入りの一台を見つけてみよう。ちなみにケバブのキッチンカーはイスラム教徒の方も安心の「ハラール認証」付きだ。



LOVELY FOOD CARS!!

CASE_03

“和田べん”を愛してやまない 伊東さんのランチ事情



和田町商店街とのコラボ弁当を学内で販売するアグリジブプロジェクトの「和田べん」部門メンバーである、都市科学部の伊東秀真さん。ほぼ毎日和田べんを食べている上に、活動を通じて和田町商店街を気に入りにすぎたため、近くに引っ越しまでしてしまった。好きなメニューはチキン南蛮とビビンバ。一人暮らしの学生にとって、揚げ物や牛肉が気軽に食べられるお弁当は嬉しい。



定番のチキン南蛮から、本格的なネパールカレーまで

和田べんとして出店しているのは、和田町商店街の「ひまわり亭」、「アジアンキッチンわだ」、「異食堂すみれ」の3店。毎日食べても飽きないメニューの幅広さがポイントだ。ボリュームも満点で、ほとんどのメニューがワンコインで収まるのもありがたい。



伊東さんお気に入りの和菓子屋、「盛光堂」。よく食べるというずんだのお団子と一緒に記念撮影。近くに住む学生たちがよくおやつ代わりに買っていくそう。



和田べんにも出店している「アジアンキッチンわだ」。ネパールの定食「ダルバート」が楽しめるだけでなく、やきそばやおつまみなどの居酒屋メニューも豊富。



和田べんの販売場所は、理工学部講義棟の1階と経済学部講義棟の1階。売り切れることもしばしばあるので、お昼休みが始まったらすぐに確保に行こう。



キャンパスでも商店街でも愛されている和田べんのマスコットキャラクター、和田丸。運がよければ、和田べんの販売中に彼が動き回る様子を見られるかも？

和田町商店街にも足を運んでみよう



キャンパスから和田町駅に向かって15分ほど歩くと、和田町商店街のゲートが目に入る。入り口のすぐ脇にあるのが、和田べんにも出店している「ひまわり亭」だ。オープンから20年、ずっと変わらぬ味で地元の方にも愛されている。

YNU NEWS

Vol.
08

横浜国立大学の最新ニュース

NEWS
1

創基150周年・開学75周年記念募金事業

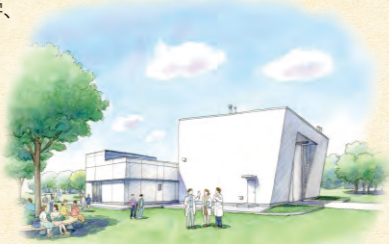
2024年（令和6年）に創基150周年、開学75周年を迎える本学。「知の統合型大学」として「世界水準の研究大学」を目指し、地域と世界の未来を創るために記念事業を実施します。

『YNU新湘南共創キャンパス創設事業』

“ヘルスイノベーション最先端拠点形成構想”に参画し、新たなまちづくりと健康長寿社会の実現に向けた教育研究拠点となる、“YNU新湘南共創キャンパス”にかかる事業です。

『台風科学技術研究センター支援事業』

台風科学技術研究センターは、日本初の台風専門の研究機関として注目を集めています。台風や気象研究にとどまらず、電気工学、経済学、経営学、船舶工学、法学などさまざまな専門分野のトップ研究者と実務家が集結し、文理融合による研究を展開しています。



『スター研究者養成事業』

世界で活躍するイノベーション創出の中核を目指す先鋭的な若手研究者を養成するために、特に優秀な大学院生を対象とした全学的な奨励金制度を創設します。

『体育施設改修事業』

教育・人材育成において重要な役割を担う体育施設を一体的に改修し、安全で高機能な体育施設の利用から、課外活動の活性化、大学スポーツの高度化を目指します。

『各学部等の周年記念事業』

創基150周年の教育学部、創立100周年の社会科学系（経済・経営・法律）を記念する事業を実施します。

Information

横浜国立大学 創基150周年・開学75周年記念募金事業

【募集期間】2023年4月～2028年3月31日

【目標額】総額5億円

【募集金額】個人/1口1万円～ 団体・法人/1口10万円～

※以上の金額にてご寄附のお願いをさせていただいておりますが、金額に関わらず、ありがたくご寄附を頂戴いたします。

【ご寄附の方法】横浜国立大学基金WEBサイトからクレジットカードにてご寄附いただけます

（ご寄附に関するお問い合わせ）横浜国立大学 卒業生・基金担当

E-mail: ynu.kikin@ynu.ac.jp TEL: 045-339-4443（月～金 9:00～17:00）



NEWS
2

JST共創の場形成支援プログラム (COI-NEXT) 地域共創分野の育成型に採択

本学総合学術高等研究院次世代ヘルステクノロジー研究センター長である下野誠通准教授をプロジェクトリーダーとした研究グループ（拠点名称：“健歩快働”をまちごと科学するイノベティブ新湘南共創拠点）は、国立研究開発法人科学技術振興機構が公募する令和5年度「共創の場形成支援プログラム (COI-NEXT)」地域共創分野の育成型に採択されました。

本拠点では、寝たきり・歩行困難の3大要因を対象に“日常生活の人の行為・動作”（ADL: Activities of Daily Living）データに着眼した独創的なヘルスケア技術の研究開発を展開。高齢になっても健やかに快活に働き続けることができるというコンセプト「健歩快働」の実現を目指します。

NEWS
3

人事が見る大学イメージランキングにおいて 関東・甲信越地域で2年連続1位、全国総合で2位にランクイン

日本経済新聞社と就職・転職支援の日経HRが実施した、「企業の人事担当者から見た大学のイメージ調査」で、本学が関東・甲信越地域で昨年に続き1位、全国総合ランキングでは過去最高の2位にランクインしました。

この調査は、全上場企業と一部有力未上場企業の人事担当者、採用した学生のイメージを聞くものです。本学は特に論理的思考力や理解力を見る「知力・学力」、着眼点などを見る「独創性」において高評価を得ました。本学では多様なステークホルダーとコミュニケーションを取り、社会の抱える複雑な課題の解決に協力して取り組む資質・能力を育成するために、社会と連携した実践的な教育プログラムを展開しています。

今後もこのような評価を得られるよう、引き続き世界や地域で信頼される実践的な人材の育成に取り組んでまいります。



横浜国立大学広報誌
横国刻々 第8号
2024年2月発行

編集・発行
国立大学法人横浜国立大学
〒240-8501
横浜市保土ヶ谷区常盤台 79番1号

アートディレクション
江原レン (mashroom design)

編集ディレクション
立古和智、栢菅樹実子、松本友也 (fridge Inc.)

デザイン
時川佳久、浅野彰浩、口町祐実 (mashroom design)

編集・執筆
栢菅樹実子、松本友也 (fridge Inc.)

製本印刷
図書印刷 株式会社

撮影
須合知也、橋本千尋

お問い合わせ
横浜国立大学
総務企画部 リレーション推進課
TEL 045-339-3027
FAX 045-339-3034
URL www.ynu.ac.jp

イラスト
中尾 悠
（表紙、P4、P8）、中根ゆたか（P28-P31）

横浜国立大学 卒業生・基金担当

横浜国立大学では、教育・研究の発展の為、広く寄附を受け付けております。ご相談・詳細につきましては、右記のQRコードよりご確認ください。

TEL 045-339-4443



アンケートのお願い

「横国刻々」のより充実した誌面づくりのために、ぜひWEBアンケートへのご協力をお願いいたします。アンケートにご協力いただき、ご応募された方の中から、抽選で3名に「YNUサブプレ&クッキー」をプレゼントいたします。当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。

応募締切：2024年8月31日（木）

ご回答方法：WEBにてご回答ください。右記のQRコードよりアクセスできます。

